



秋田県退職校長会副会長 伊藤 栄二

合する。

私は、これにもうなずいてしまうのですが、結局は③④⑤の統合ではないかと考えます。つまり、今の自己の存在は、素粒子の運動による、宇宙の命138億年の中的一瞬の出来事であり、結局は、また素粒子となつて宇宙に還つていくと考えざるを得ないのです。それでは、私たちが自覚している意識や心、魂とは一体何なのでしょう。それも最終的には、分子レベルの相互作用の産物と考えてしまいいます。しかし、その奥深さについては、フランクスの哲学者パスカルの、古

典的な次の主張に心を惹かれます（注2）。
「人間は考える葦である。（人間を）おしつぶすのに、

宇宙全体は何も武装する必要はない。風のひと吹き、水の一滴も、これを殺すに十分である。しかし、人間は、人間をころすものよりも一層高貴であるう。なぜなら、人間は、自分が死ぬことを知っており、宇宙が人間の上に優越することを知っているからである。一方、私たちは今を生きている人間として、生命の行方について、私たちが今を生きている人間として、生命の行方について、子どもや孫の世代に引き継いでいくべきことを向けて、子どもや孫の世代に引き継いでいくべきこともたくさんあります。

今日、学校では様々な課題が山積しており、まず、このことについて、次の「Q & A」は、とても参考になります（注3）。

Q 保護者からの電話で、「子どもがいじめられてい
るから学校に行きたくないと言うので休ませる」ど
のように対応するか。

A 大事なことをお伝えいただきありがとうございます。とうございまして（傾聴）。お子さんが傷ついていることに担任として気付かず申し訳ありません（謝罪）。お時間が許すようでしたら、これからご自宅にお伺いして、保護者の方、そしてお子さんと直接におうし話を聞かせていただいていいですか（迅速）と応答する。

かつては、このようなことを同僚や先輩の先生方から

現在、公私にわたって教師同士の交流が少なくなつ

ために、現職の校長先生方は、様々な工夫を凝らして

これまでの経験も踏まえて現職の校長先生方と意見を

交換し合いながら、参考になる情報を提供できればよい。

各郡市の退職校長会におかれましては、令和六年度

上げます。

2023.6.19 秋田魁新報

(注3) 「モンスター・ペアレント論を超えて」より抜粋

2023・10・6 内外教育

在職最後の年、小説家を夢見る生徒がいた。国語は苦手だけれど、携帯電話のメール機能を活用すると小説になると語った。

十数年経って、AIは飛躍的に進化している。利用が急速に広がる生成AI（膨大なデータから新しいデータを創造するAIの総称）のパイオニアであるChatGPTに、推理小説の執筆を依頼すると瞬く間に短編を創作した。構想も文字変換操作も不要で、語彙力・発想力・構成員・表現力が乏しくても誰もが小説家になれるSF的な世界が現実となったことに驚かされた。同時に、AI

がどんなに進化しても思考の命令を与え、その結果の正誤や出来映えなどを判断できるのは人間しかないことを再認識することにもなった。

AIは今や、自動車や家電、ありとあらゆる分野で多用されている。今後も更に便利な世の中の実現が期待されている。

一方、学校では、AIと密接な関係を有するICT（情報通信技術）を活用した授業づくりが始まっている。

CS委員長を委任されている中学校でも各種端末導入や無線LAN設置、授業支援アプリ準備、ICT支援員配置等で、いつでもICTが活用できる環境が整備されている。

参観授業では電子黒板、PC、一人一台の

ひとうと

「未来を拓く生成Brain

づくり」にエール



秋田県退職校長会
常任理事 伊藤 章

タブレットを活用した「個別最適な学びと協働的な学び」をねらいとする展開も増え、新しい学習スタイルの到来を感じた。生徒たちの学習意欲も高く、巧みな端末操作にも感心させられた。かつて、スライドやTP、ビデオパックを自作し、授業に臨んだ世代には隔世の感を覚え、羨ましくなった。

しかし、コンピュータへの依存が過度になると学びが受動的になり、思考や判断にかかる時間が奪われ、結果重視の学習になりかねないリスクも感じる。そのため、文科省では「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を求めており、将来はICT端末を文房具のように活用することを推奨している。

子どもたちは既にICTを日常的に活用する社会に生活し学んでいる。では、未来を拓く子どもたちを育む学校の営みを簡潔に表現するとどんな言葉が相応しいだろうか。

ICTを活用し生成AIの創造物をチェックできる確かな力を育てる「生成Brainづくり」としても語弊はないかもしれない。校長先生は、取組みは緒に就いたばかりで、結果が出るには時間がかかるとおっしゃる。学校の挑戦にエールを送りたい。

県事務局だより

事務局長 米澤 喜彦

今年度実施した主な事業

4・13 令和4年度監査 協働大町ビル

5・11 県理事会・総会 協働大町ビル

6・6～7 全連退理事会・総会

7・8 郡市会長・事務局長合同の会 東京都「きゅりあん」

7・8 郡市会長・事務局長合同の会 協働大町ビル

7・29 全連退会報第228号の発送

7・29 全連退会報第228号の発送 県会報101号の発送

10・3 全連退会報第229号の発送

10・4 全連退理事会 東京都「きゅりあん」

10・12 第49回東北地区退職校長会

協議会宮城大会 一日開催

10・21 第43回秋田県秋季研修大会 仙台市「ホテル白萩」

11・1 あきた教育の日 協働大町ビル

関係機関、各小・中学校へ葉書を送付

1・5 全連退会報第230号の発送

1・17 賀詞を各郡市事務局へ発送

3・23 全連退会報第231号の発送

県会報102号、全連退年間紀要発送

※他に全連退からの調査報告等を行って

いる。

郡市だより

Ⅱ 鹿角だよりⅡ

今年度のあゆみ

事務局長 吉田 啓一

○「総会」開催 四月二十八日

北教育事務所鹿角出張所の山口所長を始め、鹿角市小坂町の両教育長、現職校長会田中会長を来賓にお迎えし、四年ぶりの総会が盛大に開催された。
(参加三十名)

○「第二回理事会」開催 六月一日

○「第三回理事会」開催 八月二十三日

九月に開催を予定している鹿角退職校長会結成五十年記念式典に向けた進捗状況と今後の準備等について確認した。

○「鹿角退職校長会結成五十年記念式典」開催 九月二十二日

第一部の式典では、望月会長の式辞に続き、三名の歴代会長への感謝状贈呈式を行った。また、高橋一郎会長始め、鹿角出張所長、鹿角市長、小坂町長より心温まるご祝辞を頂戴した。第二部記念講演会では、前教育長米田進様をお迎えし、「平成からの教育を振り返り、今後の教育を展望する」をテーマにご講演いただいた。教育長職を含め二十三年の教育行政の要職を経て培われた教育理念のもと、これからの教育の在り方に向けて多くのヒントが練り込まれたお話をしてくださり楽しいひとときを過ごした。第三部の祝賀の宴席では、受賞者や講師の方々を囲み、時間の経つのも忘れて楽しいひとときを過ごした。
(参加五十名)

Ⅱ 大館北秋田だよりⅡ

実り多き研修会

事務局長 佐藤 久生

四月の総会・新会員歓迎会は四年ぶりに懇親会付きで開催でき盛会であった。

定例の研修会は十一月二十五日(土)、プラザ杉の子を会場に、高橋県会長をお招きし、計四十二名で開催した。研修会に先立ち開会行事で今年度めでたく八十歳を迎えた八名を紹介し代表者に長寿者祝い品を贈った。

研修テーマ「心豊かに生きる道を求めて」のもと、二人の会員の実践発表を行った。

一人目は新入会員の大館地区田山淳氏。「在外教育施設における体験活動の試み」ホーチミン・バハレーン各日本人学校の実践から」と題して、校長・教頭時代に勤務したベトナムとバレーンの二カ国で体験したことを当時のエピソードも交え発表した。

二人目は合川地区工藤隆氏。「あきたリフレッシュ学園の概要と体験活動の効果について」と題して、退職後から現在も携わっている教育支援センターとして役割をもつ学園の取り組みについて発表した。

お二方とも映像等を駆使しながらの発表で、たいへん有意義な研修会となった。

その後の懇親会は、久し振りの再会に大いに賑わい、交流を深めることができた。

同日、地区会報第十八号を発行、『会員からの声』短信』には多くの声が寄せられた。

Ⅱ 能代市山本郡だよりⅡ

今年度の主な事業を振り返って

事務局長 畠山 員範

今年度は新型コロナウイルスの第5類移行に伴い、コロナ前とほぼ同様に各事業を予定どおりを実施することができた。

①総会(4月22日開催)

4年振りに開催された総会には会員と来賓を含め45名の参加があった。事業報告や決算、事業計画、予算案等が提案どおりに承認され、新会長に佐藤敬頭氏を選出した。5名の新入会員と35名の名誉会員を含め、会員総勢187名でのスタートとなった。

②教育懇談会(7月28日開催)

現職校長会との合同研修会で、会員と現職校長のほか、高橋一郎会長をはじめ来賓を含め50名が参加した。能代市教育委員会教育委員の木村高寛氏(教育長職務代理者)の講演を拝聴した。その後、懇親会を行い、現職校長会との貴重な交流の場となった。

③各種会合・会報等

正副会長・幹事会を1回、会長・幹事会を4回開催し、本会及び県退職校長会の活動状況の把握に努めた。また、6月「事務局だより」2回の編集委員会を経て12月に「会報」を発行した。年度末にかけ今後は、正副会長・幹事会、会長・幹事会、世話人会、理事会をそれぞれ1回予定している。

Ⅱ男鹿市だよりⅡ

総会・研修会・懇親会

事務局長 浅井 繁 樹

例年、総会会場として使用している「ホテル諸井」が、令和5年3月末をもって廃業した。総会案内を送付する直前のことであつたので、会場と開催日を変更して実施した。

研修会では、株式会社おが【道の駅おが（なまはげの里オガレ）】代表取締役の鈴木剛氏が「多くの出会いに感謝」と題して講演を行った。鈴木氏は、若美町役場勤務時は公民館事業、合併後の男鹿市では幼児教育・観光振興に尽力され、退職後、現職に就いている。

講演では、若気の至りでの失敗談、「訪ソ青年の船」に参加し団長だった小畑勇二郎秋田県知事との交流等、多くの方々との出会いで自分が成長できたことを話された。

男鹿市職員時代、日本海メロンマラソンに、伝手は全くなかったが現役のオリンピック選手であった川内優輝選手の招待を提案した。周囲から「無理だ」と言われる中、手紙を書いたり、直接ご本人の職場を訪問してお願いし実現することができたそうである。

「オガレ」では、特に海産物が豊富な物産館の商品を絶対に切らさないように社員に指示しているそうである。

なお懇親会は、「オガレ」の「東洋一の海岸線にある男鹿のレストラン」で開催した。

Ⅱ秋田市だよりⅡ

今年度を振り返って

事務局長 加賀美 俊 一

今年度は、四年ぶりに総会を開催した。参加者数は、コロナ禍以前より少なく、三年間の空白の影響を感じた。文書での案内だけでなく、役員を中心に参加の呼びかけの必要性を感じた。ともあれ総会にて事業計画や予算等を協議し承認を得て事業をスタートした。

十一月には、これも四年ぶりに現職・退職校長会教育懇談会を開催した。今回は、グループ協議題を「学校現場の課題と取り組み」としたこともあり、現職も話しやすい雰囲気で、グループ協議が活発に行われ、その後の懇親会も盛り上がった。

年二回発行している会報では、会員のセカンドライフの紹介や学校再編で閉校予定の中学校のラストイヤーの取り組み、現職・退職校長会教育懇談会の様子や感想などを掲載している。会員に向けての貴重な情報発信のツールとして位置づけている。

新型コロナウイルスが5類に移行し、再開した事業が多くなったが、参加者が少ないのが課題である。即効薬はないかもしれないが、集う楽しさをアピールしながら、少しでも事業への参加者を増やしていければと思っている。



Ⅱ由利本荘・にかほだよりⅡ

四年ぶりの退職・現職校長交流研修会

事務局長 田 口 良 徳

四年ぶりに開催した退職・現職校長交流研修会では、本荘南中学校の土倉新也校長先生、象潟小学校の阿部道校長先生より、タブレット・デジタル教科書を活用した授業実践等、本荘北中学校の阿部明校長先生からは部活動指導の地域移行、クラブ結成の本地区の現状について発表していただきました。また、退職校長からは「退職後に楽しむ」と題して元象潟小学校校長の佐々木正氏よりアンナブルナベースキャンプへのトレッキング体験についてお話をいただきました。タブレット端末やデジタル教科書の日常的な活用、部活動の地域移行の現状と共に少子化による合同チームの編成状況について改めて知ることとなりました。また、佐々木氏の発表からは、趣味は違えど、楽しむことの素晴らしさを感じると共に退職後の過ごし方、楽しみ方について改めて考えることとなりました。

四月の総会では「六郷氏・岩城氏・打越氏入部四百年の意義と地域文化」と題し、由利本荘市観光文化スポーツ部文化スポーツ課長の長谷川潤一氏から講演をしていただきました。地域理解を深めるよい機会になりました。いずれの研修も計画通り実施でき、充実した一年となりました。

Ⅱ大曲仙北だよりⅡ

この一年を振り返って

事務局長 佐藤 心一

四年振りの総会を四月二十二日グランドパレス川端で行った。総会五十八名、祝賀会四十五名とここ数年で最高の会員数。会員講話は青谷晃吉氏の「秋田の水環境の現状」水に棲む生き物から見た光と影」で、講話後、質問多数で盛り上がった。祝賀会には、後期高齢者未満が多かったが九十四歳の秋田県初の女性教員の参加に皆さん敬服した。

同好会では、グランドゴルフが二回（二回目は大雨の中強行）、軌道に乗った麻雀（MCUP）は二回目十七名の参加者で盛り上がった。ゴルフ（GCUP）は、前会長T氏が一回目（十五名参加）二位、二回目（十七名参加）三位と大健闘。スキー同好会も二回たざわ湖スキー場で行われた。郷土カルチャー同好会は「羽後町新そば&歴史探訪」で鈴木家の総本家を訪問し新そばを食した。

更に地区持ち回り「研修視察旅行」は、中仙を訪問し、ジャンボ兎経営施設訪問、地場産業のリンゴジュース等の工場訪問、酒造秀よしで利き酒の銘酒をたらふくごちそうになり、最後は料理屋でジャンボ兎定食をごちそうになった。兎年の方が兎を食べられなかったのは残念であった。

今年より会報は四月と八月の年二回発行。低予算で情報量満載である。

Ⅱ横手市だよりⅡ

この一年を振り返って

事務局長 佐藤 稔

コロナ禍により、三年間総会をはじめ一堂に会しての事業は自粛せざるを得ない状況が続いていました。しかし、今年度四年ぶりに対面での総会を五月下旬に開催することができました。引き続き行われた研修会では、元埋蔵文化財センター所長の高橋務氏を講師に迎え、「大正期『金沢古蹟』の調査と保存の取り組み」というテーマで講話をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。その後、懇親会を開催し、久しぶりに会員同士の親睦を深めることができたことは、何より嬉しいことでした。

総会を終えてからは、本会の二大行事の一つである「教育を語る会」の開催に向けて準備を進めてきました。ところが、六月中頃から新型コロナウイルスの感染が再び全国的に広がりを見せたことから、感染予防を第一に考え、急遽開催を見送ることにしました。

来年度に向けては、これまでの懸案事項であった総会の四月開催を実現するべく、粛々と準備を進めているところです。令和六年度は、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザの流行が落ち着き、計画した全ての事業が開催できるとともに、会員同士の交流を一層深めていければと願っています。

Ⅱ湯沢雄勝だよりⅡ

成瀬ダム見学

事務局長 滑川 道彦

萌友会の今年度の事業は総会、現職との合同研修会、新入会員歓迎会、親睦レクリエーション、会報の発行と例年通りの計画でした。その中でコロナの影響で中止していた現職との合同研修会を開催できたことは喜びでした。

研修会は現職からの提案で成瀬ダムの見学としました。9月20日（水）、当日の参加者は萌友会23名、現職18名の41名で成瀬ダム右岸展望台にて現職と合流し、現場を見学しました。最初にKATIMA DX LABOで成瀬ダム全体に関わる説明を聞きました。

この施設は、AR・VRやパネルを活用し、鹿島が考える土木の未来やACESEL（クワッドアクセル―自動化重機の無人作業）の概要、ならびに成瀬ダムについて、体感・学習できる施設です。タブレット端末をかざすと完成時の立体映像が見えます。その後、小雨となったためバスに乗ったまま作業現場を見学し、最後に展望台で工事現場全体を見渡しました。無人の重機が計画的に作業を進め、壮大なダム建設が進んでいる様子を見ることができ充実した研修となりました。

残念なことは、研修後に予定していた懇親会が、学校で新型コロナウイルス感染の広がりが見られたため中止となってしまったことでした。

第43回秋季研修大会報告

《研究主題》

退職後の生きがいや在り方を求めて

令和5年度秋季研修大会が10月21日に、協働大町ビルにおいて会員66名の参加を得て開催されました。冒頭、高橋一郎会長はあいさつの中で、全国大会と東北大会どちらの会でも、退職校長会の入会率が話題となったこと、他県との情報交換では秋田県全体としては80%で頑張っていることをお話ししてきたとの報告がありました。

講演会では、秋田県教育庁保健体育課の田口課長から「部活動の地域移行について」お話をいただきました。部活動の地域移行は会報101号の巻頭言で会長が述べたとおり、教育現場での喫緊の課題の一つです。田口課長のお話から、現在の秋田県の現状を把握するとともに、どこに課題があり、今後どのような方向に進むのかを深く理解し、考えるよい機会となりました。

また、研究発表は大館北秋田の小林先生と、男鹿市の伊藤先生のお二人からお話をいただきました。小林先生からは授業改善とキャリア教育に関するお話、浅井先生からはナマハゲ行事に関するお話で、ふるさと教育にも通ずる貴重な内容であったと思います。お忙しい中準備いただき感謝申し上げます。

全体会終了後の懇親会には、45名が参加し、あたたかい雰囲気の中で近況を報告し合い、楽しい時間を過ごすことができました。

講演

演題

児童生徒を取り巻く環境と課題について
部活動の地域移行に向けた取組

秋田県教育庁保健体育課 田口 康氏

1 保健体育課の主な取組と担当班

保健体育課には班が4つあって、調整企画班の他に3つある。○学校体育・部活動、○健康教育・食育、○防災教育及び学校安全の3つである。授業のサポートあるいは体力の向上、それから中体連・高体連、それから高野連に関することを担当するのが学校体育チームである。

2 コロナ禍における児童生徒への影響

令和4年度の児童生徒の体力合計点が、過去最低で、これは完全にコロナの影響だと思う。これは、全国平均も同じである。また、秋田県は、体格も全国上位で全国平均よりも高い位置にあるが、それでも過去最低である。それから、肥満傾向児の割合についても、小学校男女、中学校男子の割合が増加している。



中学2年の女子だけ、増えてない。その他、朝食の欠食、睡眠不足、スクリーンタ

イムの増加、生活習慣の乱れ、不登校生徒の増加などの課題がある。

運動に関しては言えば、走ることに課題がある。他のスポーツテストの点数は高いのに、50m走だけガクンと落ちていて、他に走ることにに関してはまったく走れない、左手はまったく振るけれども、右手はこう振るとか、左右非対称の子が多くなっている。また、運動する子としない子の2極化傾向があり、これは非常に大きな課題である。特に中学生の女子に顕著である。中2の女子の12%ぐらいは、1週間の総運動時間がゼロで、10人に1人は全く運動していないことだ。1時間未満、1週間に60分しかないという子も2割いる。一方で1週間で420分以上という子という子も結構いる。部活動をやっている子はいつぱい運動する、やらない子は本当にやらない。

秋田県は、「運動・スポーツが好き、大切だ」と考える子の割合が非常に高いので、この割合をもっと高められれば、運動をもっとやってくれるのではないかと思われ、運動を好きになってもらえる取組を進めている。

3 人口減少と部活動の現状

全国的に、中学生、高校生世代の少子化がどんどん進み、今後30年間で3割減という試算がある。一つの運動部活動あたりの参加人数は、平成25年には約20人ぐらいいたが、今は16・4人で、かなり減っている。一方で

部活動の数は減っていない。子どもが減っているの、どうしても一部活動の人数は当然減ってくる。次に加人数だが、これも減少傾向にあって、全国の男女の平均が58・1%である。秋田県は62・3%なので、全国よりはちよつと高く、男子中学生で見れば73%が運動部に入っている。女子は、吹奏楽部に入子も多いので、男子よりもちよつと低くなつており、51・8%の子が運動部に入っている。部活動の種類でいうと、サッカー、ソフトボール、野球という団体スポーツが50%近く減っている。

部活動加入生徒は、18000人くらいいたのが、12000人くらいになり、30%減っている。学校の数が減ったのにあわせて部活動の数も10%減った。それに比べて、子どもの数は30%減ったので、当然合同チームが出てくる。

中学校における合同部活動実施チームの推移だが、平成25年度には、18チームで延べ23校の合同チームであった。ところが、昨年の令和4年度は、98チーム延べ235校となっている。チーム数は5・5倍、延べ数は10倍である。約10年間でこれだけ単体でチームを組めないチームが増えたということになる。

4 部活動改革の必要性と

地域連携、地域移行

こうしたことから部活動改革の必要性が叫ばれ、生徒がスポーツ、文化芸術活動に親し

む機会を確保することや生徒同士の好ましい人間関係の構築、という部活動の意義を継承しながら、部活動の地域移行を進めましようということになったが、なかなか簡単にはいかない現状がある。

実際に学校現場の状況として、必ずしも専門性や意思に関わらず教師が顧問を務める体制の継続は、学校の働き方改革を進めるうえで困難である。秋田県では、顧問についている先生の約半分が未経験で、いわゆる素人の先生が部活の顧問になっているという状況である。分らない競技の顧問をやるというのは、すごく負担である。まして部活動が終わる時間はほぼ勤務時間の終わりの方なので、当然時間外の活動になる。そして土日は大会がある。もちろん忙しい。

地域移行を進めていく上でいくつかの問題が出てきた。例えば、スポーツ庁では部活動のガイドラインを示し、平日(5日間)の部活動は1日は休みに、土日の2日のうち1日は休みにするという目安を示していて、各学校に通知している。問題なのは、新たな地域クラブも、これに準じてやりなさいという点にある。民間側からすれば、1日しかやればだめだとなれば、会費を少なくしかとれないので、活動経費もままならない。

一方で、今あるクラブ、例えば水泳のアスレチックとかスイミングクラブとか、硬式の野球のリトルリーグのシニアクラブとか、そういうのは、今まで通りやってもいいと言っ

ている。また、大会の在り方が見直され、クラブチームの参加が可能になったが、ガイドライン通り休みを入れて真面目にやっているチームと、無視しているわけではないけど、ガイドラインが元々ない、毎日練習してきたチームと一緒に戦うことがいいことなのか、という議論が起った。

合同チームの編成の問題もある。二つの学校がそれぞれ組んでやっても、1年生が入って人が増えたから単独で出なさい、組めないチームは組めないチームで組みなさいということ、大会間近にチーム編成が変わってしまうケースがでてきた。規定の周知が直前になったことですごく問題になった。同じ例が全国でもたくさんあった。

さらに、クラブチームで他地域から来ている生徒は大会に出られないという事例がでてきた。例えば秋田市の支部大会から出るときに、秋田支部から出るのに、県南県北の生徒が試合するのはおかしいだろうという議論である。全国的に言えば、他県から来ている生徒もいるので、緩和してだれでもいいよと許容している競技団体とそうでない競技団体とに分かれたためにこれもまた問題になった。大会運営側からすると、許容すると、おそらくチーム数が増え、当然試合数も増えるわけで運営が大変になるので、まずは様子を見て今年は駄目にするという競技団体が多かった。

来年からは徐々に緩和されると思われる

が、今以上に運営が大変になることが予想される。サッカーのように、学校の部活のチーム、クラブチームの大会というふうに分けている競技団体もある。いずれ大会は中体連が主催するというよりも、競技団体が主催してチームを集めて運営するという形に今後はどう進んでいくと思われ、今度は、中体連はいるのかとなる。大会運営は、いったい誰がやるのか、既存団体を活用した場合ガイドラインの運用はどうするのか、役員の高齢化などで生じている人員不足をどう解消するかなどさまざまな課題がある。

もう一つ地域移行に関わって大きな問題は指導者の確保の問題である。ある競技団体関係者のある声に、「学校の先生忙しいって、地域さ寄こすって言うんだべ。おれがだも忙しじや。学校の先生方休ませで、土日は俺がださ働けってか。てば、学校の先生の給料下げて俺方さけれ。」と言う人がいました。

現在学校の先生の負担を軽減する制度として、部活動指導員という制度がある。これは部活動指導と引率できる人を市町村の会計年度任用職員になってもらい、部活動指導者として活動してもらう制度である。去年は67人だったが、今81人いる。来年はもっと増やす予定である。部活動指導員は、どういう人が多いかというと、普通の会社員が3割くらいで一番多い。教員OBは14%くらい、あとは農業、自営業である。これとは別に外部指導者というのがある。これは中学校で579人

いる。コーチみたいな人で、補助的な指導をする方である。こういう方が600人近くいるので、部活動指導員と併せて潜在的な指導者はいるのだろう思っている。

国の推進計画では、市区町村がいろいろな団体と連携して、地域クラブ活動をやるという場合、あるいは、総合型地域スポーツクラブとか民間事業がやる場合で、それがすぐできない場合は、部活動指導員を活用する方法を地域連携として、地域移行を進める前の段階として位置づけている。

そこで県としても部活動指導員を増やす取組を進めている。指導者バンク、指導者登録システムを、今年作ろうと思っている。具体的には、「指導者をしてほしい、この曜日に、これくらいの時間指導してもいいよ」という人をまず入力してもらい、そのデータベースを作って、実際のマッチングは総括コーディネーターという人がいて、そこでマッチングしてもらい、どうですかと内々に相談する、個人情報に配慮しながら県教委も絡んでマッチングするという形がとりあえずいいのかと考えている。

指導者の選定もなかなか難しく、指導方針というかチームといろいろと話さないと、うちは勝ちたいのか、うちは楽しければいいのか、そういうのに合わせてやらないとなかなか難しい。やはり指導者というのは、技術をしっかり教えられる人がいいと思っている。保護者からすれば、学校でどんなに努力

の過程を見て褒めましたと言っても、結果的に逆上がりができなければ面白くないわけで、それよりは、母さん見て、と言って2日でやらせてやると言ったら、2日後に逆上がりができるようになってれば、過程なんか聞かなくてもうれしい。だから、そういうスキルを持った人というのは指導者として非常に大事だと思う。

秋田県の地域移行だが、その推進計画はホームページに載っている。推進計画の中では令和5年度から7年度まで推進期間とし、この中で地域移行を一つの学校でも一つのクラブでもいいので、市町村で手を付けてほしいとお願いしている。極端な話だが、部活動は原則土日休みにするので、何かやりたい人は、自分で探してほしい、これもある意味、地域移行の形の一つである。あと、学校の先生がやってもいいというのであれば、普通の部活動と同じように、場所も学校でやって、土日だけ学校の先生の身分を離れて一般の人としてやるので、その先生に謝金を払うという形も地域移行の一つの形である。

そういったパターンをいろいろ示してみても、市町村にあったものを選んでやっていただきたい、というのが推進計画の中身になっている。したがって、あれやれこれやれというよりも、こういう形があるし、こういう形もある、参考にしてほしいといった計画になっている。

研究発表1

追究型学習のすすめ

Ⅱ教わるからの卒業Ⅱ

大館北秋田退職校長会 小林 一彦氏

◇キャリア教育の重要性

轍は、通ったときにできる、経験したあとにできるもので、これはキャリア教育のキャリアの語源である。キャリアとは運ぶという意味で、未来につながる轍と考えてほしい。要は、自分らしく生きるんだ、ということ子どもたちに植え付けていくことが大事である。

キャリア教育というのは、幼少期からずっと大学まであるいは大人になってまで続くという教育である。基礎的汎用的能力という何にでも使える力。簡単に言うと、何かしらの壁があったときに、それを乗り越えていける力を学校で幼い頃から付けさせていくということである。これを実際に授業でどのようにやっていくか、というのが課題になってくる。



頭では分かっているが、実際にどうやればよいのか、先生方の悩みに、私はそれができるだけ

答えてきたつもりである。

◇日本の子どもたちは頭がいいが

PISA2015の結果、科学的リテラシー、数学的リテラシーでトップ、日本の子どもたちの頭はすごくいい。一方で、「算数・数学は、価値がある、役に立つ、生活に役立つか。」の質問では、下から二番目。理科は最下位である。ものすごく頭がいい子どもたちが、「価値がある」だとか、「意義がある」だとは思っていない。厚生労働省の調査でも、「科学を勉強することは自分にとって役に立つ」「科学を勉強すれば 将来仕事に就くために役に立つ」と考える子どもたちの割合は最下位である。一方で成人の科学技術の知識に関する認知度調査（18歳から60歳）、調査項目20問、正答率32・2%、16力国中13位で知識が定着していない。

◇ジグソーパズル型からブロック型へ

「ここ出ますよ。ここが出るから明日まで覚えてこいよ。」だとか、「テストに出るから大切なんだ」だとか、そういったやり方、あるいは、全員に対して一斉指導だけで進めるやり方、何よりも、答えを出すだけの授業になってしまっている。だから、答えが一つ、結果が全てというような考え方になってしまふ。これが日本の現状である。

一生懸命勉強してきたことが、やらなくなると、それが剥落してしまう。これからは、ジグソーパズル型からブロック型というか、ピタッとはめてこれでOK、というのではな



知識は消えていらない。刺激型と言ってドリル形式のものは、操作性は速くなるが思考力はない。全国にタブレットが入ったが、あれでドリルやっても、操作性は高まるが、思考力は絶対つかない。答えが複数あったりなかったりする問題に果敢に取り組む、これが大切である。

◇追究型学習のすすめ

課題解決能力を付けるというには、実際には演習をやっていくことで、学習課題をちよつと変えるだけで、大きな違いが出てくる。でも、毎回追究型をやるといのは無理なので、習得、活用、探究のレイアウト、つまり単元の構想をしっかり立てて、追究型の授業を実践することである。前任校ではかなり怒られながらやった。そしてできることがわかった。最初先生方は、そんなことしたって絶対失敗しますよ。うち方の子どもたちは、全体の前で話をするのは得意なのでしょせんよ、絶対手を挙げませんよ、って言っていた。でも、手が挙がった、一人。ずっと待ってたらどんどんしゃべり出した。やっていなかっただけの話だった。

くて。また、インプットからアウトプット型へ。これは、当然だが、使っている知

研究発表2

マチのナマハゲ行事

男鹿市退職校長会 浅井 繁樹氏

◇ 民俗行事としてのナマハゲ

昭和53年に、国重要無形民俗文化財に指定されている。当時の紹介文には「この行事の内容は、ムラ内の若者たちが面をかぶり、ケデ（藁で編んだ着装具）をつけて各家々を訪れ、威厳のある所作でムラ人に接するという形態では共通している。年の折目（トシコシ）に神が来臨し人々に祝福を与えるという趣旨の行事は全国的に分布するが、男鹿のものほど古態をとどめ、かつ濃密な分布を示すところは少なく、わが国古来の民間信仰の形態を示す典型例としてきわめて重要である。」とある。

◇ 民俗学と民俗調査

民俗学は伝統的な生活文化を研究対象とし、文献以外の伝承を手がかりとする。その研究方法が民俗調査である。民俗調査とは、地域に足を運んで、人々から話を聞き、それを記録にまとめることで、何時間もお話を聞き、分らないことがあれば、再度お邪魔して質問する。多くの方は、自分の体験を誰かに伝えたいという気持ちで接してくれる。



◇ ムラとマチの民俗調査から「ナマハゲ行事の特色と変化」（二つの地区を比較を通して）

比較項目	北浦安全寺地区（ムラ）	船川元浜町3・4区（マチ）
1 行事主体者	・ 青年会員中心 ・ 1991年から子供育成会が応援 ムラ：民俗学で農村、山村、漁村集落のこと マチ：民俗学で都市のこと	・ 複数の有志 <u>阿部のナマハゲ</u> 阿部興四男氏（戦後すぐ～1974年） <u>小野崎のナマハゲ</u> 小野崎勝正氏（1950年代～1980年頃） ・ 子供育成会（1975年～） 会長が事前に阿部と小野崎の了承を得る
2 実施時間	・ 約7～8時間（午後3時～午後11時）	・ 約2時間（午後5時半～午後7時半）
3 家での活動	・ 家に上がる（全戸の2割で微減傾向）	・ 全て玄関口まで（1975年から）
4 特色	①面 個人制作し家に保管、色は金銀 ②ケデ 3枚、毎年作り直す所作が多い ③持ち物 何も持たない ④ナマハゲの数 3匹2組 計6匹 ⑤名前 オクヤマノオクノスケ キバノキンスケ ササデノサンスケ ⑥所作 多い（カド踏み・座り方・ケデを揺するなど）	①面 市販品、色は赤と青 ②ケデ 3枚、毎年同じ物を使用 ※ 子供育成会では、面や衣装は商店会から借用 ③持ち物 包丁と桶、御幣の棒 ④ナマハゲの数 2匹1組 計2匹 ⑤名前 なし ⑥所作 少ない

◇ マチの聞き取り調査から

元浜町では、戦後複数の有志のナマハゲが存在していた。まずは阿部興四男氏のナマハゲである。興四男さんは元浜町に住んでいた。よそのから地元を守ろうとする代表格で、腕っ節が強く、昭和二十年代の終わりに「阿部組」という、やくざの親分になった。実際のナマハゲは地元の若者が担い、阿部組の名前と力を借りていたようだ。もう一つが小野崎勝正氏のナマハゲである。小野崎さんは、男鹿の観光ナマハゲの先駆者であり、全国にナマハゲを広める役割を担った方で、ナマハゲ踊りの第一人者でもあった。本業は酒造りに使用する木桶職人で、面や衣装は自作していた。

二つのナマハゲは活動範囲が重なることがあり、酒の勢いも加わり路上での喧嘩が絶えなかったようだ。それは縄張り争いでもあった。そんな中で1975年、子供育成会のナマハゲが誕生した。誕生した理由は、同じ家に二度以上来ること、阿部のナマハゲが子供にとって怖すぎたことである。

◇ 保存伝承に向けて

元浜町では人手が足りず、2013年から休止している。保存伝承のための一つの試みとして、地元の中学校や観光協会と相談して、「ナマハゲ伝道師検定」中学生バージョンを設けた。受験した一年生全員が合格し認定証書を頂いた。このような学校の取組が行事の保存伝承に役立つと思っている。

東北地区退職校長会協議会
第四十九回宮城大会報告(概要)

十月十二日(木)に仙台市「ホテル白萩」において、昨年度に引き続き、一日開催という形で行われた。本県からは、高橋会長、伊藤副会長、米澤事務局長の三名が出席した。

大会では「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」という協議題のもと、活発な討議がなされた。

講話では、新たに全国連合退職校長会会長となった田中昭光氏が、東北地区の協議題に沿って、自身の経験や全連退の活動について熱く語った。講話の最後には各地区が会員減少傾向にある状況に鑑み、退職校長会の活動が、生きがいにつながる(生活を豊かにする)ということを呼びかけながら、これまでやってきた活動を継続することが大切と締めくくった。

その後、秋田、青森、岩手の三県より発表があり、本県からは令和五年度の会長・事務局長合同の会の概要をもとに、秋田県退職校長会の現状や課題について、米澤事務局長が発表した。

会の最後に、次年度の開催県となる福島県より、令和六年十月八日(火)・九日(水)に福島市で開催予定であるが、会場の確保に難儀している旨の説明があった。また、二日目に福島の復興状況をバスで視察する計画も進めているので、そちらもぜひ参加してほしいとの強いお願いがあった。

会員の(ご)逝去 (敬称略) 心からご冥福をお祈りいたします。(10号以降)

氏名 年月日 住所 氏名 年月日 住所

黒澤 研二 5・7・26 鹿角市十和田毛馬内 神田 武 6・1・22 秋田市檜山

佐藤 利吉 5・6・27 大館市早口 伊藤 勲 6・2・5 秋田市下新城

佐藤 朗 5・7・21 北秋田市坊沢 齋藤 光正 5・7・4 由利本荘市二番堰

成田 純一 5・8・22 大館市南神明町 (瑞宝双光章)

佐藤 一巳 5・8・27 北秋田市阿仁荒瀬 大澤 淳二 5・7・31 由利本荘市長坂

夏井 光彦 5・11・4 能代市一本木 小松 雄三 5・10・14 由利本荘市北ノ股

(正七位) 三森喜一郎 6・1・5 由利本荘市小人町

豊澤 昭夫 5・11・27 能代市二ツ井町 (瑞宝双光章)

山崎 照雄 5・12・16 八峰町八森 鈴木利右工門 6・1・23 大仙市太田町

(正六位) 佐藤駿一郎 6・1・27 仙北市角館町

大倉 靖彦 6・1・4 能代市鹹渚 岡 強三 6・2・1 大仙市北檜岡

奥村 隆夫 6・1・14 能代市若松町 加藤 幹宏 6・2・7 大仙市北檜岡

藤田 武良 6・2・1 三種町森岳 藤谷 久一 5・6・23 横手市大雄

北嶋 弘 6・2・7 能代市青葉町 藤原 俊治 5・7・22 横手市山内

渡邊 登 5・8・7 男鹿市船川港 加藤 春作 5・8・18 横手市明永町

佐藤 松平 5・11・27 男鹿市船越 中村 昭一 5・8・24 横手市旭川

武田 直 6・1・6 男鹿市船川港 富谷 義寛 5・9・16 横手市増田町

鈴木満支朗 5・7・15 秋田市桜 齊藤 喜孝 5・11・19 横手市十文字町

大島 新助 5・7・20 秋田市保戸野 高橋 重行 5・11・23 横手市平鹿町

長谷川仁司 5・12・2 秋田市横森 佐藤 精純 6・2・26 横手市南町

五十嵐久雄 5・12・13 秋田市河辺 藤井正次郎 5・3・25 埼玉県越谷市

渡部 菊治 6・1・6 秋田市高陽幸町 神部 龍平 5・9・1 湯沢市愛宕町

会員寄稿

じわり生きがい

このひととき

偉人の横顔



鹿角

安保 範子

「貴方、社会科の免許持っているわよね。だったら手伝ってほしい事があるんだけど。」

(註：言葉は柔らかいが限りなく命令口調！) 高校の恩師から電話があつたのは、定年退職後二年間勤めた初任研関連の仕事を終えた三日後の事だった。まもなく九十歳を迎える恩師の言葉に抗う術ももたず、鹿角市先人顕彰館研究員の任を引き受けることになった。

館の行事の一つに、東洋学の世界的権威者である郷土の偉人内藤湖南の書簡を読む「湖南を知る会」がある。研究員が分担して講師となり、読み下した文章に若干の解説をつけて発表する。過去の会で取り上げた書簡は調査資料集として発刊されているが、ここ二・三年は父内藤十湾が湖南に宛てた手紙を読んでいる。その内容は、世情に絡んだ政権や時の人物批評など堅い一文もあるが、私信故に思わずくすりとする文章もある。たとえば、湖南が秋田師範学校に入学した際には、試験

の点数や順位の解説や提出した作文の添削をしたり、どこでどんな英和字典を買ったのか早く詳しく教えなさいと催促したり、教育者としての熱意溢れる内容もある。さらに、病弱だった湖南に「小豆を食べろ」「牛乳を飲め」「洗濯はこまめに」と健康を気遣う言葉は度々登場し、その親心にはほろりとさせられる。頻繁に交わされた手紙からは、偉人たちの新たな一面を垣間見ることが出来る。

正直、くずし字典や漢和辞典片手の解説は手間暇かかり、誤読の度に恩師の檄が飛び、郷土史家たちの前での発表はストレスだらけだが、健やかなセカンドライフを送るための「教養(今日用)」の一つとして、もう少しの間、偉人の横顔を楽しみたいと思っている。

(平成三十年三月退職)

思いのままに



大館北秋田

明石 勝美

最近取り組んでいることが三つ程ある。一つは、地域貢献にと三年前から参加しているスクールガード活動である。気軽に引き受けた朝の指導は気が付くと毎日のお勤めとなった。子ども達から元気を貰うこともさることながら、自身の生活リズムを整え、更に地域の方々とのコミュニケーションが取れる機会

となり、毎日様々な出会いを楽しんでいる。

二つ目は、統合時に廃校となった校舎周りの環境整備を手掛ける「旧中央小学校保全会」での除草活動である。会員は地域の自治会長会を中心に腕に自信のある人達で構成。その中であつて足手まといにならぬよう手持ちの草刈機を念入りに整備しつつ、草木の状況に適した替え刃を準備。更に刈刃を研ぐ一手間を加えて参加している。その甲斐あつて切れ味抜群。事前準備にも楽しさを感じている。

三つ目は、車で国内を旅する試みである。退職後、これまで温めてきた計画をスタートさせたのは妻の退職を待った四年後である。ルートは日本海側を南下し再度北上するコース。鶴岡の加茂水族館を皮切りに北陸・山陰そして大分の別府へと。BSテレビ「こころ旅」で紹介された紙屋温泉に浸かったところで折り返し、山陽・四国へと進み更に近畿・北陸を経て家路についた。日数は二十日間で走行距離は約五千Kの旅であつた。道中思い掛けないトラブルも多少あつたが終わってみれば楽しい思い出である。各地の名勝旧跡や景勝地を巡り、その土地の気候風土や文化に触れたことは感動の絶えない日々であつた。コロナ禍を除くと現在も旅を続けている。

今後遊び心で自由な活動に身を委ね、思いのままに毎日を過ごしたいと思っている。

(平成二十五年三月退職)

赤字専業農家に



能代市山本郡

米川

貢

退職した年の秋に父が亡くなり、その翌年から農業経営者になった。水田二丁四反、畑三反。初年の冬、二棟の育苗用ビニルハウスが雪に潰され、春はその撤去から始まった。一棟を新設し百万円也。ドライブハロー老朽のため更新、これも百万円。その翌年には田植機が修理不能の破損。GPS付き新車購入三百五十万円。他に管理機二十五万円、刈払機七万円。設備更新は、予想外の出費だった。幼少時のように、家畜を入れて有機農法を夢見ていたのだが、鶏五羽を飼って考えの甘かったことに気付いた。あの頃は八人家族だったのだと。自家用野菜は育てているが、採れるときには一気に採れる。自家消費に余る。かといって出荷できるほどではない。面積はあるので作付けして出荷も考えたが、人手がない。結局、父が続けてきた状態を維持している。違いは米の反収、父は十俵私は八俵だ。収量より作業効率を重視している。毎年倒伏した稲を手刈りさせられた経験からだ。省エネ・省力に努めている。播種量を規定の五割増しにして箱数を減らす。発芽をそろえるための催芽処理省略。学生時代の実験や作物学、土壌学、肥料学等の講義が今生きている。

分家筋の水田も一緒に耕作しているので一連の農作業を手伝ってくれている。後期高齢者となり体力の衰えが見える。今年からは側状施肥一箱二十kgのペーストをやめ、土壌改良材散布と同時に元肥として入れることにした。生育斑が予想されるが今秋の収量をみたい。

人権擁護委員、公民館分館長、生涯学習奨励員、郷土芸能保存会長、協働活動推進員、学校運営協議会長を務めながら。

(平成二十八年三月退職)

今年度もそして来年度も現役で！



男鹿市

吉田 雅美

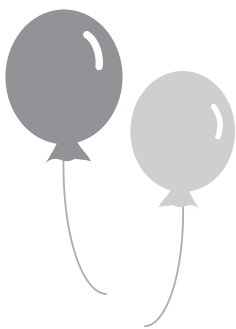
六十歳退職から、この三月で四年が過ぎようとしています。退職はしたものの、現在も中学校でフルタイムで勤務(部活動も担当)しています。退職後は、再任用で三年部主任として中学校に勤務しました。最後まで勤務しましたが、途中体調を崩し、再任用継続は断念しました。母親を看護しながら半年間別の所で働きましたが、「もう一度教壇に」という思いが膨らみ、講師登録をして、昨年度は地元の中学校に勤務しました。不安を抱えながらのスタートでしたが、信頼できる上司と同僚の皆さんに支えられ、心優しい生徒た

ちに囲まれての毎日は、とても新鮮で心地のよいものでした。また、上司の先生方が私のつたない授業のよいところを見つけてほめてくださったことも嬉しかったです。「今日も一日楽しかった」と思える日々は本当に充実していて、今の私の支えにもなっています。

さて、私が退職後に挑戦したいと思っています。たことは、「マラソン」と「ファーストクラス世界一周」です。若い頃から走ることが大好きでいつか挑戦したいと思っていたのですが、持病の膝痛のため、今はウォーキングもままなりません。海外旅行の準備も着々と進めていましたが、新型コロナウイルスにより実現に至りませんでした。その時の周りの状況や自分の健康状態により、実現できないことも多いことを改めて思い知らされました。

最後に、来年度ですが、自分の体と心の健康のため、非常勤講師として継続して学校で勤務する計画です。そして、体が元気なうちに、国内や近くの海外への小旅行を楽しみながら、本格的な定年後の生活の準備を進めていきたいと考えています。

(令和二年三月退職)



老後をどう生きるか



秋田市

千葉

学

早いもので、退職から三年がたちましたが、今もフルタイムで働き、退職前と代わり映えのしない日々を送っております。それでも、退職前から心待ちにしていたセカンドライフには入ってはおりますので、これからやりたいことをいくつか考えてみました。

【その一 ゆっくりと旅行がしたい】

本当は、キャンピングカーを買って、のんびりと日本中を巡って歩きたいと思っていたのですが、いろいろな準備を考えると、これは実現できない可能性が高いです。ならば、せめて曜日感覚が薄れるくらいの長い旅行に一度ぐらいは行ってみたいと思います。

【その二 何かいい趣味をもちたい】

もともととは草野球を趣味としていました。県大会や五百歳野球で優勝したり、全国大会に出場したりと、結構楽しくやっていたのですが、歳とともに体が続かなくなり、数年前に引退しました。その後はこれといった趣味を持てずにいるのですが、健康のためにも、ゴルフを少し頑張ろうかなと思っています。

【その三 一人で楽しめるものをもちたい】

最近「何もすることがないなあ。」と感じることが時々あります。このままでは、仕事がなくなくなったときに、ただの引きこもりに

なってしまう恐れがあります。それではさすがに困ったことになりますので、一人で楽しめることを見つける必要があります。これは結構難易度が高いです。まずは、街歩きや庭いじりからでも始めようかと思っています。

皆さんはいかがですか。きっと、すてきなセカンドライフをお過ごしのことでしょう。私も、皆さんに負けないように頑張ります。

(令和三年三月退職)

アンナプルナベースキャンプへ



由利本荘・にかほ

佐々木

正

二十年ほど中断していた登山を、五十四才の時、上郷小全校鳥海登山をきっかけに再開しました。再開後、退職までは秋田県周辺の山に登っていました。退職後は日本アルプスや八ヶ岳などにも足を伸ばしています。

退職三年目の今年度は、ネパールのアンナプルナベースキャンプ(BC)トレッキングに行くことができました。このトレッキングは登頂を目指すものではなく、アンナプルナ(8091m)登頂のための登山基地BC(4130m)まで歩く旅です。

トレッキングで歩く道は、中盤までは現地の人々の集落を結ぶ土や石畳のアップダウンの多い生活道路で、終盤は登山道でした。宿

泊はロッジと呼ばれる簡素な宿で、そこで三度の食事もいただきました。

七日目に到着したBCは一面雪でガスもかかり、残念ながら目指すアンナプルナの姿を見ることができませんでしたが、道中では八千メートル峰であるダウラギリやアンナプルナをはじめとした数々の高峰を見ることができ、現地の人々の生活に触れることもできましたので、とても印象深い旅となりました。機会があればまた行きたいと思わせてくれた十日間総歩行距離115kmの旅でした。

『心に残ったこと』

○道行く人みんなと交わした「ナマステ」

○ロッジの経営者のご家族と一緒に歌って踊った楽しい夜

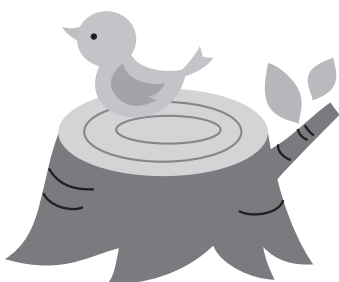
○ごはんとスープが食べ放題で必ず満腹になるネパールの国民食ダルバート

○おいしかったネパールの地酒ロキシー

○山のずっと上まで作られている段々畑

○人なつこいたくさんの自由な犬たち

(令和三年三月退職)



ワクワクしながら



大曲仙北
戸嶋 藤 典

退職して三年、野菜作り、バスケット指導、登山などと、ワクワクしながら過ごしています。我が家には僅かばかりの田畑があります。田は従兄弟にお願いし、畑で少々野菜作りをしています。これは現職の頃から取り組んでいたもので、そんなに苦になりません。そして、退職一年目、あまり深く物事を考えない私は、先輩の誘いに乗って、道の駅「なかせん」で野菜販売を始めました。さらに、三年目にはイオン中仙店の産直でも販売しています。ちよつと調子に乗っています。今後の楽しみは、三年目を迎えるシャインマスカットです。秋には少し実がつく予定で、専門家からは、「5房くらいは実らせてもいいです。本格的な収穫は5年目からです。」と言われています。果たして実がなるのか？美味しいのか？ワクワク、期待が膨らみます。野菜作りだけでは暇ですから、母校の中仙中で男バス指導のお手伝いをさせてもらっています。小学校勤務が長く、ミニバスしか指導したことがありませんし、進化している最近の指導方法や戦術を知りません。YouTubeで勉強しながら日々指導しています。今、バスケット指導からもワクワクをもらっています。

私の年代の年金は64歳からです。質素な生活を心がけていますが、プチ贅沢が大学同期との登山です。県内は、駒ヶ岳、栗駒山、鳥海山など、県外は、富士山、木曽駒ヶ岳、乗鞍岳（上高地も）に登りました。これもなかなかワクワクします。体力があるうちにもう一回富士山に挑戦したいと思っています。退職四年目もこんな感じで過ごしています。う。まだ働いている同期の皆さん、早くこっちで一緒にワクワクしませんか？待っています。

（令和三年三月退職）

退職後の大きな決断



横手市
鈴木 雄 幸

石巻に引っ越してきて一年が過ぎようとしています。まさか横手をこんなに早く離れるとは夢にも思っていませんでした。退職直後はコロナ禍で、夫婦で旅行にも行けない日々ではありましたが、二女の結婚と二人の孫の誕生で石巻まで何度も行き来する機会が増えました。

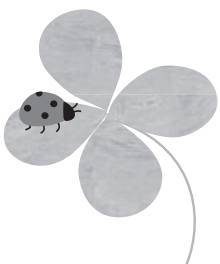
そして退職三年目の春。思い切って横手の自宅を売却し、石巻に中古のマンションを購入しました。太平洋側なので天気も穏やかで、雪は滅多に降りません。冬の日課であった雪

かきや雪下ろしもなく、冬でも自転車やバイクに乗ることができます。仙台や松島も近く、利府のアーリーナにライブを見に行く回数も増えました。ドリカムや浜田省吾、あいみょん、松任谷由実など一度は見に行きたいと思っていたライブも見ることができました。

生活して驚いたことは、東松島市の航空自衛隊の基地が近いので、毎日のように自衛隊機が飛行訓練をしていることです。轟音でうるさいときもありますが、ここには、ブルーインパールのアクロバット飛行など見たことのない景色がありました。また、石ノ森章太郎のゆかりの地であるため、駅周辺には仮面ライダーやサイボーグ009のたくさんの像があり、それを見ると学生時代の懐かしい思い出が蘇ります。

二女夫婦以外は知り合いもないところですが、好きなアーティストのライブに時々参戦し、退職後に買ったバイクで牡鹿半島や奥松島を巡りながら、今まで見たことのない景色を探していきたいと思います。孫の成長を見守りながら

（令和三年三月退職）



歌うことが大好きな仲間とともに



湯沢雄勝

土 田 尚 子

退職して数年後、同じ時期に二つの音楽団体から誘いを受けた。一つは湯沢女声コーラスの会。かつてはママさんコーラスも今やばばさんコーラス。もう一つは童謡唱歌の会。前任の指導者のピンチヒッターのつもりで参加したのだったが、あれから5年あまり、今や私にとってはこちらもかけがえのないものとなっている。

女声コーラスでは、昨年、コロナ禍でできなかったお客様を迎えてのコンサートを4年ぶりに開催した。練習は毎週火曜日の午前中2時間ほど。一昨年結成60周年を迎えた女声合唱団で、高齢化が進み、体調を崩したり、離れて暮らす家族のもとに越して行ったりと、年々メンバーが少なくなっている。

童謡唱歌の会は、月に一度、第三土曜日の午後集い、文部省唱歌や古くから歌い継がれている子どもの歌や抒情歌などを歌っている。こちらは女声コーラスの会以上に高齢の方々なのだが、新しいメンバーも増え、雨が降っても吹雪いていても、毎回楽しみにして来られる。上手下手は全く関係なく、懐かしい歌を存分に歌う楽しさや心地よさを各々に味わっているように見える。先日「里の秋」を歌った時のこと、歌詞にある「さよならさよなら椰子の島、お船に揺られて帰られ

おめでとうございます

(順不同・敬称略)

祝 叙 勲

氏 名	現 住 所	功 労	種 類	受章日
水野 哲哉	大館市比内町	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・7・1
金 新佐久	北秋田市米内沢	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・10・1
高谷 松英	大館市釈迦内	秋の叙勲 (教育功労)	瑞宝 双光章	5・11・3
浅利 司	大館市山田	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・12・1
浅野 英徳	大館市柄沢	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・12・1
倉橋 保夫	秋田市仁井田	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・10・1
佐良土 惇	秋田市東通	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・10・1
荻原 幸美	秋田市東通	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	6・2・1
阿部 要	由利本荘市小人町	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	5・8・1
津川 美長	横手市百万刈	秋の叙勲 (教育功労)	瑞宝 双光章	5・11・3

る・・・」歌い終わると、最高齢97歳の男性

がすつと立ち上がり、正にこの歌と同じ体験をしたことを語られた。その方の実体験と歌の情景を重ね、あふれる思いを感じながら歌ったこの時のことは忘れられない。これからも声の衰えにあらがいがら、響き合う女声コーラスを、そして懐かしい歌で心も身体もリフレッシュできる童謡唱歌の会を、歌うことが好きでたまらない仲間とともに、自身も楽しんで続けていけたらと思っている。

(平成二十八年三月退職)

【あとがき】

コロナ禍が収まったと思ったら、昨年の大雨に今年早々の能登半島地震と災害が立て続けに起きています。また今冬は暖冬で、これからの農業などへの影響が心配です。

さて退職校長会の活動ですが、各郡市からの報告にもあるとおり、予定した行事も滞りなく終了しているようです。とりわけ現職の校長先生方との交流がなされたことは、とても喜ばしい限りです。久しぶりに学校現場のお話を聞いていて、日々子どもたちのために奮闘する先生方の様子を垣間見ることができました。